

空の器の器の空

赤木明登・菅原玄奨・寺田真由美



2021.3.13 SAT - 4.3 SAT

MA2Galleryでは、技法や世代、現代美術と工芸などジャンルを超えた作品を、空間に美しく共存させる、という企画展を試行錯誤しながら継続して開催しています。生活の中にはボーダレスなものや世界が身近にあるということ、ジャンル関係なくプロフェッショナルな仕事の中には普遍性があること。展示を通して作家さんや、観にいらして下さる皆様と対話をしながら、答えが最初にあるのではなく、みえてくる何かに思いを巡らせる展覧会です。

今回も、漆芸、彫刻、写真と出自も世代も異なる3人の作家さんたちに展示をお願い致しました。「在・不在」「表（質感）・内（量感）」を強く意識して制作をされ、作家の個人的なことがらや主張は深く潜ませ露にしない、という共通点が挙げられます。「空」をもっているとも言えるかもしれません。「空」という在、「空」からの想像力。

「人が不在することで、本当に大切なものが現れ、遺してくれることがある。」と出品作家である寺田真由美さんが、2020年秋に新作の天視シリーズに寄せたテキストの中で書かれています。コロナの世界的流行で、人のありかたや、生活の時間について、改めてそして新しい視点で考えるようになった今、現代の私たちにとって大切な何かについて、思索が交差する展覧会になればと思います。

MA2 Gallery

12:00 - 19:00 日・月・祝休 東京都渋谷区恵比寿 3-3-8 03-3444-1133

赤木明登 AKITO AKAGI



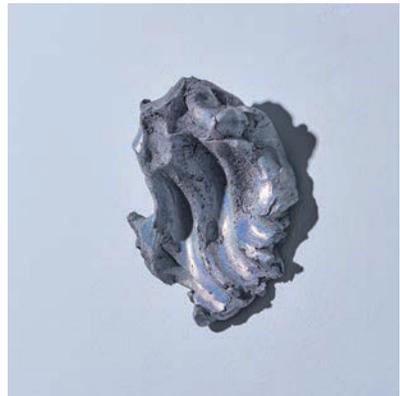
1962年岡山人

塗師。中央大学文学部哲学科卒業後、編集者の仕事を経て、角俣三郎の漆器に感銘を受け1988年輪島に移住。輪島塗の下地職人・岡本進のもと修行を積んだ後、1994年に独立。里山の自然に囲まれた中で生活し制作する。輪島塗のスタンダード、自然の有りの儘の姿、神話などの文化、それらを汲みとった中から生まれた形と塗り。漆芸の原点を反芻しながら、現代の暮らしに息づく生活漆器＝「ぬりもの」の世界を探求している。また、工藝、ものづくりの世界を伝えるべく執筆もおこない、主な著書に「二十一世紀民藝」（美術出版社）、「名前のない道」（新潮社）、「美しいこと」（新潮社）、「美しいもの」（新潮社）、共著に「形の素」（美術出版社）などがある。

1993年東京生

2016年東京造形大学造形学部彫刻専攻領域卒業。18年同大学院造形研究科修士課程彫刻専攻修了。「テクスチャーと触覚性」をテーマに、FRPや粘土を主な素材とした彫刻作品を制作。消費的なファッションをまとめて記号化されていく現代人の身体をかたどり、わずかな触覚性と匿名性を強調した作品は、移ろいゆく現代の表層や実態の拠りどころのなさを内包する。主な個展に2020年「anonym」（EUKARYOTE、東京）、2016年「invisible」（TAV gallery、東京）。主なグループ展に、2020年「Input/Output」（銀座蔦屋書店）、2019年「The Metamorphosis」（EUKARYOTE、東京）、2018年「シブヤスタイル vol.12」（西武渋谷店美術館、東京）など。2017年に「群馬青年ビエンナーレ」奨励賞を受賞。

菅原玄奨 GENSHO SUGAHARA



寺田真由美 MAYUMI TERADA



東京生。1989年筑波大学大学院修士課程芸術研究科修了。2003-2004年文化庁新進芸術家海外研修でニューヨークに滞在。現在ニューヨーク在住。90年代まで立体作家として活動した後、2000年以降、ミニチュア模型の部屋や窓辺、風景などをまずつくり、それを自然光で撮影した写真作品を制作。「光を撮る」「光を彫刻するつもりで制作している」という作家は、「不在という存在」について作品で問い続けている。近年の主な個展に2020「不在についての5つのシリーズから」（鎌倉画廊）、「天視 Another Angle」（ギャラリー・アウト・オブ・プレイス）、2018「Photography as Art - Seeking Living Absence」（ジャパングリエイティブセンター、在シンガポール日本大使館分館）、2011「Living Absence」（森鷗外記念館、ベルリン）、2010「プラットフォーム 2010 寺田真由美—不在の部屋」（練馬区立美術館）など。国内外で展示多数。東京都現代美術館、ソウル写真美術館などに作品が所蔵されている。